# ふくろう新聞

＜発　行＞
特別養護老人ホーム
淡路ふくろうの郷
広報委員会

洲本市中川原町
中川原28番地1
TEL：0799-25-8550
FAX：0799-25-8551
ホームページ
http://www.normanet.ne.jp/~hyoufuku/

今年は12月22日が冬至。一年で一番夜の長い日。かぼちゃを食べ、ゆず風呂に入る日です。先日、ふくろうの郷のご近所の木村さんからたくさんのゆずをいただきました。ありがとうございました。
気が付けば今年も残りわずか。「手洗い」と「うがい」で風邪に負けず、みなさん、良いお年を。

## 第14回全国聴覚言語障害者福祉研究交流集会（全聴福研）in 兵庫

全聴福研オプショナルツワー（淡路ふくろうの郷）

兵庫県で初めて開催された全聴福研。参加していただいた皆様、要員等でご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

参加者は全国各地より聴覚言語障害児・者、高齢者の施設職員や家族、支援者等526人。入門講座や9つの分科会・分散会での討論などを通じ、実りある大会となりました。

入門講座では事業所立ち上げの経験を利用者と共に発表いただきました。31本のレポート発表があった分科会では、各事業所の経験を共有する事ができました。

今回の集会での学びを兵庫レベルの研究交流会開催に繋げられるよう頑張っていきたいと思います。

第14回全聴福研実行委員会
事務局次長：竹原哲章

## 全聴福研に参加して

保育・介護担当として参加させてもらいました。

「今まで子供の介護があるため講演等の参加を見送ってきたが、今回は預かってもらえたので参加できた。本当に良かった」と言ってくださる方がいて、（逆に自分たちの方が勉強させてもらったのに）と恐縮してしまいました。

介護：加野明宏

第4分科会「高齢聴覚障害者の介護を考える」に参加しました。

高齢聴覚障害者にとって一番大切なのはコミュニケーション。そして、安心できる環境であると学びました。

ふくろうの郷では、入所者の気持ちにどれだけ寄り添えているでしょう？

認知症が進み、コミュニケーションで意思確認ができなくなった場合、本人や家族に代わって職員が判断しなければならない時があります。

私たちも施設全体として入所者に関わり、「帰る場所はふくろうの郷である」と思っていただけるぐらいの人間関係・環境を築きたいです。

看護：渋谷裕子
看護：近本顕子

第2分科会、ふくろうの郷調理職員・岩林寛子さんの「ソフト食」に関する発表に参加しました。

出席者の皆さんから「素晴らしい」「頑張っていますね」などとお褒めの言葉をいただきました。みんなで協力し、苦労し、努力して作っているソフト食が評価され、少し誇らしい気持ちになりました。

調理：坂本千尋

第3分科会「コミュニケーション保障と集団づくり」の司会を担当しました。「人間の成長には年齢は関係ない。集う場所がある・支援する人がいる・自分も誰かの役に立てることに気付く・必要とされていることを実感する。これらが生きがい（意欲の源）となり変化が生まれる。支援者もその変化を感じ取り、それを皆で共有しながら周りに広めていける」、当たり前過ぎて忘れがちなこれらの大切さを再認識し、コミュニケーションとは何なのかを改めて考えさせられる一日となりました。

淡路聴覚障害者センター
：瀬田栄美

入門講座受付

# 入所者紹介
# 山口頭蔵（やまぐち とうぞう）さん

**頭蔵さんと、妻の哲子さん、娘の隆子さんからお話をうかがいました。**

▲禁煙は無理？
山口頭蔵さん

山口頭蔵さんは、大正12年9月19日、宮崎県延岡市生まれで、現在87歳です。11人兄弟の3番目。難聴の妹さんが1人、他の兄弟はみんな聞こえる人でした。

子供の頃、戦争があったこと、ご家庭があまり裕福ではなかったことが理由で、小学6年生の途中までしか学校には通っていません。

24歳の時、兵役検査がありました。体も丈夫だったので「甲（合格）」の判定と言われたのですが、ろう者と分かると「丁（不合格）」になり、兵隊にはなれず、とても悔しい思いをされました。

28歳の時に3歳年下の哲子さんと結婚。友達の紹介だったそうです。子供は二人。頭蔵さん一家は、「デフファミリー（全員ろう者の家族）」です。

昭和31年、家族で尼崎に出て、住友鉄鋼で働きました。その後、伊丹に引越し、伊丹では大工や道路工事の仕事をしました。職場では周りは聴者ばかりでしたが、いじめられたり、喧嘩したりすることもなく、みんなに助けられながら仕事をしていたそうです。60歳くらいまで仕事を続けました。

▲（左から）隆子さん、頭蔵さん、妻の哲子さん。インタビューの日に。

▲若かりし頃の頭蔵さん。

頭蔵さんは若い頃、なかなかの美男で、もてたそうです。「浮気はなかった」と哲子さんはおっしゃいます。奥さん思いの旦那さんだったのですね。

淡路ふくろうの郷に同じく入所している伊藤照子さん（84）とは家族ぐるみのお付き合いがあり（特に照子さんと哲子さんが仲良し）、尼崎に住んでいた時に家が近所で、お互いの家を行き来したり、一緒にろうあ協会の婦人部の旅行に出かけたりしていたそうです。頭蔵さん一家が伊丹に引っ越してからもお付き合いは続き、歳を取り、照子さんの足が弱くなってからは、照子さんは娘さんの運転で伊丹まで通われたそうです。

頭蔵さんは釣りが大好きでした。釣り道具がたくさん家にあります。

釣りに関するエピソードとして、頭蔵さんは岩場から落ちて意識を失い、体が半分、海に浸かったままの状態で発見されたことがあります。体は冷え切り、一緒に釣りに行っていた友人の発見がもし遅れていたら、そのまま死んでいたかもしれないそうです。しかし、その後も頭蔵さんの釣り好きは変わりませんでした。

釣りをしている頭蔵さん

今年の9月に誕生日祝いで職員と喫茶店へ出かけた際、頭蔵さんは「海が見たい」と言われ、海岸を散歩しました。久しぶりの海に何を思われたのでしょう・・。

今回のインタビューで、また新たな頭蔵さんを知ることができました。ご家族の気持ちと頭蔵さんの気持ち、両方を大切にしながら、これからも心に寄り添える援助を目指したいです。

**介護：角村智康**

## 一緒に楽しみませんか
ボランティア募集

**しめ縄作り・餅つき**
**12月18日（土）13:30～**
地域の皆さんのご指導の下、作ります。

**初詣　1月2・3・4日**
3日に分けて、お参りします。
どこに参拝するかは、今、話し合い中です☆

# 第11回ふくろう学習会

▲鷲尾衛鳳住職

11月27日（土）、宝球寺（神戸市兵庫区）住職、鷲尾衛鳳氏をお招きし、「ターミナルケア」「スピリチュアルケア」「傾聴」などをキーワードにご講演いただきました。

参加職員の感想です。

ご住職は、仏教の基本的な考えの下、支援を求めている人々に幅広く関わる「ビハーラ」という活動をされています。

講演の中から、利用者の「痛み」を理解し、どの「痛み」を一番に感じておられるのか相手の心境を読み取ることが大切なのだと学びました。

例えば、利用者が「死にたい」という言葉を口にされたとします。その時、その言葉の「思い」を我々援助する側がどれだけ汲み取れるかが重要なのです。

病の床に臥している終末期の方に対して、病名を隠し「元気になって」と励ます言葉が果たして本当にその方を助ける言葉になっていたのでしょうか。

ケアする側がしたいケアになっていては本人にとっての安らげる場所を提供できないと思いました。

相手に「何ができるのか」を考えるだけでなく、ただそばにいてあげるということも本人にとって大切なことだと教わりました。

死を学ぶ研修を積み重ね、その人らしく、安らかな気持ちで最後を迎えられる環境を作り、人と共感できることで、淡路ふくろうの郷の理念でもある「共に生きる」ことに近づけるのではないでしょうか。

介護・神代雅司

▲分かりやすくお話しくださいました。

# 淡聴協クリスマス会

12月5日（日）、淡路聴力障害者協会のクリスマス会にふくろうの郷からも約30人が参加しました。楽しいひとときでした。

# リレーエッセイ　父のこと、母のこと　評議員・廣地タマヘ

母は、今年満91歳になりました。父は、昭和19年に東部ニューギニアで戦死をしました。母25歳でした。

父は大阪で小児科医をしており、母はその病院の看護婦で、昭和17年1月に結婚。大阪での結婚生活は1年余り。舅、姑との同居で、姑に意地悪をされたことなど、遠い昔、母がちらっと言ったことがありますが、その当時の話はあまり聞いていません。

昭和18年2月に私が生まれ、父はその3月1日、姫路連隊に入隊をし、そのまま帰ってきませんでした。

父と同じ医者になってほしいと、苦労をしながら私を育ててくれたのですが、母の望みは叶えてあげられませんでした。

平成17年10月、私は父の眠るニューギニアを訪れました。透き通るような青い空、土埃の道。大地を手で触れ、潮風を肌で感じ、父の想い、悔しさを、父にまた会えたような、話ができたような感動を覚えました。しかし、その時、母はもう何も分からなくなっておりました。

そんな母も、昨年2月より淡路ふくろうの郷でお世話になって、のんびりと、元気に日々を過ごさせていただいております。有難いことです。

父と母、この二人のお陰で、今、私はここにおります。感謝！

廣地さんのお母様。ふくろう喫茶にて。

# 地域を語る

## 第24回 名勝と海難地 昔の水の大師付近

中川原町厚浜　畑田巍　氏

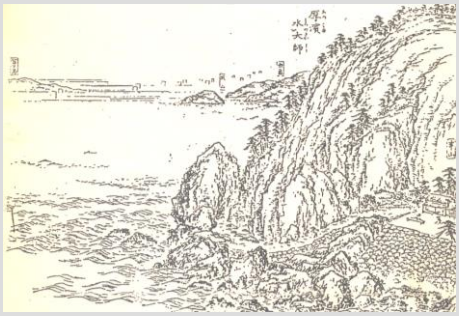
水の大師付近は、淡路八景・洲本八景に入選した程の景勝地である。「晴れた日は、紀・泉・河・摂・播の五州が一望でき、霞んだ日は墨絵のようだ。」と古人は称賛した。

又、岩間から湧出する清水は、旅人を清浄な気分にさせたにちがいない。

しかし、旅人は、急勾配の岩山に阻まれ、止むなく海中から突き出た大岩との間を通り抜け、更に砂浜を過ぎて磯岩をよじ登らなければならなかった。少し海の荒れた日は、波にさらされたり、物を失ったりして。難渋（なんじゅう）したのである。淡路では海難事故多発の所であった。

道中の安全祈願のため、いつしか道端に観音堂が建てられた。冬の海は、よく荒れる。観音堂は、旅人の宿となることもあった。もちろん、清水の音と、風と波の砕ける音しか聞こえない。幸い満月なら、大きな月の出を見ることができて旅の慰めとなった。

観音堂には、千手観音・弘法大師・不動明王が祀られている。誰言うとなく、清水を「大師の水」。観音堂を、「水月庵」とも「水月堂」ともいう粋な名称に変化したのである。



▲淡路国名所図絵

# パンダに会えたよ☆ 王子動物園

くつろぐカンガルー▼

▲寺岡さんと、後ろに見えるのはパンダのタンタン。

入所者の井上知子さん（80）が、動物が好きだということをご家族からお聞きしていたので、今回の外出先の候補に王子動物園を入れたところ、一番人気で決まりました。入所者のご家族も2名参加してくださり、11月25日（木）に行ってきました。

カバを見ると「おぉー、なんて大きいんだ～！」と歓声が上がるなど、終始笑顔で皆さん楽しまれました。

来年の五月五日に百歳を迎える寺岡初枝さんは、何度も私たちにお礼を言ってくださり、「本当に楽しかった。外の爽やかな空気を実際に感じて、気持ちもすっきりした」と4日間ぐらいずっと笑顔でおっしゃってくださいました。

皆さんから早速、次回のリクエストとして、大阪の「海遊館」が出ています。またみんなで楽しく出かけましょう。

介護・山西　龍

# 安乎小学校と交流

たこ焼きじゃないよ、ベビーカステラだよ。チョコや生クリームをトッピングして食べました。

安乎小学校六年生24名との交流会が12月2日（木）にありました。

みんな、手話を使って自分の名前と特技（一輪車や組体操など）を発表・披露してくれました。

自己紹介のあとは、ふくろうの郷の喫茶スペースでベビーカステラを作りました。小学生は積極的に入所者に「おいしい？」「私が作るよ」と話しかけてくれ、後片付けも手伝ってくれました。「お互いに助け合う」ということがあたりまえに身についている素敵な子供たちでした。

12月16日（木）、今度はふくろうの郷が安乎小学校へおじゃまして、給食をごちそうになります。